

の史実を脳裏に描きながら終戦まで、否、現在も東亜の平和と発展は日本民族の重要性を説き、高齡をむかえた今日も努力していることはむべなるかなである。

終戦後の満蒙大陸は中国兵、八路军、ソ連軍が入れかわり立ちかわり攻撃し、日本人に対する罵詈雑言の暴行、殺戮、徹底的に悪逆無人道の限りをつくしたが、川村氏は危機一髪を幾度かがれて、南下できたことは奇跡とか、運がよかったと言いますが、川村氏その都度における情勢判断と素早く断行する創意工夫にあった。

それと、ハルピン学院で教授した教え子が全滿の要所に多くの支持協力者がいたことである。このことは良き教授であったことだ。

更に川村氏の父親が、南滿州鉄道の幹部技師として、蓋平、撫順、公主嶺、遼陽、長春と、滿州の重要都市を中心として建設事業に四十余年の長い間に、滿州現地人との深い交友をもった積善のお蔭が、その息子、川村一正氏に眼にみえぬ恩恵に浴し得た。

引き揚げて岐阜市にハルピン街と名付けたところ

に、バラックマーケット一枿ひとまを求めて親子四人で人生第二の出発をされた。

もち前の他人を立て、己れは後に控え目で働き、大きく繊維業を仕上げ、更に住宅組合を設立し、国民の要請に応じて、岐阜に、名古屋に、東京に約七百戸住宅を建設した。

その間、引揚者団体岐阜県連合会長、社団法人引揚者団体全国連合会理事に就任し、引揚者福祉向上に努力している誠意に市や県の理解と協力を浴している幸せ者である。

(社引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

引き揚げ体験記

愛知県 渡辺 貞二

終戦前

私の物心のついた時代は滿州事変から支那事変へ

と、軍一色の時代で、軍人となってお国のため奉公することが日本人に課せられた一つの約束事のようにでした。

徴兵検査時に自己意志で在外部隊の志願をして、昭和十一年二月当時の満州国へ入隊し、昭和十五年六月南滿州鉄道株式会社、吉林鉄道局管内の敦化電気区に就職し、給与事務を担当しました。

昭和十八年十月結婚して、社宅を与えられて経済的にも物質的にも不安のない安定した毎日でした。

昭和十九年頃から主食の配給が少し悪くなり、仕事の内容も軍関係のものが目立って多くなったようにでした。

社宅の近辺に多く原地住民が居住していましたが、治安は良く安定した日々のうちに終戦を迎えました。

終戦を迎えて

昭和二十年八月十四日、吉林鉄道局敦化電気区の庶務助役の井上さん（引揚後、死亡）は明十五日正午に重大放送があるから、聴くようにと吉林鉄道局からの伝達事項を各部署に伝えていました。

その当時の満州国は空襲も知らず、物資の不足は感じられたものの、主食の欠配もなく、戦局がそれほど悪化しているとは思っていませんでした。重大放送の内容は時局を一そう認識して、それぞれの立場で努力するようとの放送ぐらいだろうと思って、ラジオを聴きましたが、ザーという雑音の中から只今から玉音をお送りしますというアナウンサーの声につづいて国歌が聞こえ、耐え難きを耐えというような断片的なことしか聞こえず、その放送の意味は、はつきりつかむことが出来ませんでした。そんな折り、同じ社宅に住む工務区に勤務の予備役中尉のMさんが

「無条件降伏ダ……ソナナ馬鹿ナ……」と大声を上げ会社の方へ走って行かれるのを窓越しに見て私も驚いて電気区へもどりました。

一步事務所に入ってみますと自国民同志の輪が出来てヒソヒソと語り合っつて日本人を見る目は冷たく、異様な雰囲気でした。

昭和二十年八月十五日の重大放送により、外地在住の日本人の筆舌に表すことの出来ない悲惨な日々幕

開きとなりました。

私はこの時、家内と二歳の男の子と三人で、満鉄敦化電気区の社宅で終戦を迎えました。

二十九歳で電気区の庶務係、給与事務を担当していましたが、軍関係の仕事が多かったです。

これより少し前、社宅近くの住民（満州国人）が、家財を売れ、子供をくれと満語で話しかけて来るようになりました。

なぜそんなことをいうのかと問いますと、彼はお前には知らないだろうが日本は戦争に負け、日本人の男は、ソ連の捕虜となり、家財は捨てることになるから俺に売れというようなことを、満語で話してくれました。信じられんことで相手になりませんでした。今から思うと敗戦のニュースは、原住民の間には早くから流れていたようでした。

とって社宅付近の原住民は、私共に危害を加えるようなことは、一切ありませんでした。

敗戦といっても職場を放棄して良いという指示のない限り電気区の事務所に出て、残務整理に当たってい

ますと、玄関から背の高い赤軍の将校が、部下もつれないで一人で入って来て金庫を調べ、各部屋を巡回し、洗面所で服装を整え、元入った玄関から、送って出た私に右手を挙げてキチッと敬礼して静かに出て行きました。

なんの要求もなく行動は静かで、礼儀正しく感じられました。襟章から見て上級将校の、GPUのようでした。

最初の犠牲者を葬る

十八日の午後、手の空いている者は「スコップを持って裏の広場に集合して下さい」との町内伝達で広場に集合し、五十歳から六十歳ぐらいの男性の服毒死体を埋葬しました。

奥地在住の日本人は、敗戦と同時に長年住み馴れた住家を捨て、敦化駅を目標にして夜を徹して逃げ出されたようですが、その途中暴徒に襲われ家族別れ別れとなり、老人でしかも半身不随の父親がろうじて息子の背中に負われて、私共のいる日本人街にたどりつきホッとされたものの、これ以上息子に背負われてい

てはと考えられ、恐らく息子さんと合意の上での身の処理であったと思われます。

折角ここまで背負って逃げのびて来た父親に、服毒させねばならないこの孝行息子の心中思いやるに、まことに断腸の思い。

その気持ちはどう表現して良いのか、恐らくこの戦争がなければ、この親子もそして多くの外地在住の日本人も、貧しくとも親子団欒の平和な日々と、与えられた余生がたのしく送れたものを。

夏の日射しはようやくやく、やわらぎ始めた午後五時半頃だったと思います。

放心したようにその場を去りかねている息子を残してそととその場を離れました。

杜宅の屋根の向うに赤い夕陽が、今日の出来事もこれから展開される悲惨な出来事にもなんの関係もなく、一日の営みを終え静かに沈み始めていました。

赤軍の進駐

八月二十日頃だったと思いますが、敦化駅の待避線へ、赤軍の兵士の少数が有蓋貨車で進駐して来ました。

誠にお粗末な服装でしたし、婦人の姿も見られましたが、この頃から、極端に治安は悪くなり始めました。各部落で日本人住宅に暴民の掠奪が出はじめました。

敦化駅の貨物集積場に野積みされている膨大な軍需物資に、近在の住民が暴徒化して掠奪を始めました。

よく蝟集という言葉そっくりのありさまに赤軍の兵士がピストルで威嚇発砲しますと一時は散りますが、すぐ又元の掠奪状態にもどり、赤軍兵士では手のつけようのない混乱状態にたまりかねて、敦化停車場司令部を通じて、敦化独立守備隊（武装解除前の関東軍・敦化駅より一キロほど南に、当時厳存）へ暴徒鎮圧のため、日本軍の派兵を要請しましたところ曹長指揮する一個内務班の二十人ほどの日本陸軍が整然として、暴徒の中に割って入りました。空砲一発撃つことなく暴徒は蜘蛛の子が散るようにして散り、静かになりましたが、これが、私共の見た日本陸軍の最後の姿となりました。

夜明け方、何か騒々しい物音に驚いて目をさましま

した。

なんと私共の社宅の東側路上に、空き缶を叩きながら棒切れなどを持った五十人ほどの暴徒が、私共の社宅を襲うべく態勢で並んでいました。私共と二百メートル程度の距離に睨み合いましたが、私共が抵抗したため暴徒はどうすることも出来ず解散したようでしたが、暴徒に襲われた三十人くらいの日本人家族が「相手にならん方が良い、相手になって怪我してもつまらんことだ。」といいながらリュックサックを背負い、手に持てるだけの物を持ち、近くの日本人小学校に避難して行きました。

一旦引き返した暴徒は、今度は赤軍の兵隊を先頭にして襲って来ました。

抵抗すると赤軍の兵隊が銃を向けるので、どうすることも出来ませんでした。

土足で侵入してアツという間に長年営々と培った家財をまたたく間に持ち去りました。

暴徒のなかの一人は争うようにして仏間の真新しい白布につつまれた遺品を持ち、余程良い物と思つたの

かそれ一つをかかえこんでいました。

「お母さんがソ連の兵隊さんと押入れにはいった」と母親と一緒にいた幼い女の子が表で奉仕活動をしている父親に知らせに来ました。驚いて家にかかけもどつた時は、既に遅く泣きぐずれている奥さんを、日本人小学校の医療班へ伴うのが精一杯でした。

前を押えて半狂乱になって社宅をとび出して来る若い娘さんもいました。

時計を強要された中年の男性が、余りしつこく強要されるのでズボンにかくしていた時計を渡そうとポケットに手を入れた時、何を感じがいたのか、いきなり腰のピストルを抜いて至近距離から男性に向けて発射したり、近くの川で取水中の男の水筒を強要し、拒絶された腹いせにピストルを乱射するなど全くこの世と思われぬ傍若無人の行いに無力に等しい私共はどうすることも出来ず、唯々恐ろしい日々の連続でした。こうした無法者は、年若い兵隊に多く見られ腕には刺青を入れマンドリンと称する、ドイツ戦線での分捕品の自動小銃を所持するか腰にピストルを帯していま

した。誠に粗暴、私共の危害の多くはこの刺青部隊から受けたように思います。

その半面、物の判断力は乏しいようでした。卓上電話機を見てこれは何かというような若い兵隊に、ハンドルを回して受話器を耳にあてて電話機であることの仕草をして見せたところ、電話でなくハンドルを回してチンチン音のする方が珍しかったらしく、制止も聞かずコードを引きちぎって持ち去りました。

マンドリンを肩に、電話機を抱えてチンチン音をさせながら帰って行く兵隊のうしろ姿は幼児以下で、こんな連中に敗れたかと思うと誠に腹立たしい気持ちで一杯でした。

インク瓶のインクを酒と思つたらしく、呑めるかというような仕草に、哀れさを感じました。

ツメ切りを使ってツメを切つて見せて、元の形にして兵隊に渡すと、どうしても使うことが出来ませんでした。

自動車営業所にはガソリン代用としてメチルアルコールを使用していましたので常にドラム缶に保管され

甘い香を放っていました。このメチルアルコールを呑んだらしい兵隊がマンドリンを抱えて口から泡を吹きながら、道路の測溝にひっくり返っている姿を良く見かけました。

こうした無法者から婦女子を守るべく、九月半ば頃、婦女子は近くの日本人小学校に移し、男は住宅の二、三か所に集まって生活することにしました。

吉林へ移動

日本人小学校は、各地からの移住者で超満員、そのうち子供の「麻疹」が発生して、またたく間に蔓延しました。

次から次へと収容されて来る避難民の集団と、冬への準備に備えて私共は、吉林鉄道局に助けを求むべく、老人と幼児のいる家庭から逐次吉林行きを計画、九月半ばに六十人ほどが敦化駅から吉林へ汽車で出発しました。

途中、奥地開拓団から逃げて来られたと思われる御婦人の一行と一緒にになりました。

今にもとび出しそうなお腹を、たった一枚のドンゲ

ルス（麻袋）で覆った人。

雀の巢のような頭髮、煤だらけの顔、全く正視しがたい姿でした。

これが国策に添って一時は華やかに大陸花嫁とさわがれた方々と思うと全くやり切れない思い、殆ど中年以下の女性が多く、男性の姿は見当たりませんでした。

途中の駅毎で乗り込んで来るロシアの兵隊に時計を強要されながらも、列車は吉林駅に夜十時頃到着しました。

灯火管制下の暗い長いホームを女、子供を守りながら、前の人に離れぬようにして恐る恐る進みました。

お前のは軍靴ではないか、脱げと独特の言葉に命のちぢまる思いをしながら列を崩さず吉林鉄道局の厚生会館内にはいつてホットしました。

鉄筋建築で外部から侵入される心配のないしつかりした建物に守られて、廊下や卓子の上で思い思いの姿でゆっくり休みました。

吉林は敦化に比して平穏でした。

しばらくして私共は吉林市内の満鉄社員の職制上、

上位の方の社宅に分散してお世話になることが決まり、私は吉林鉄道工場長の高橋さんのお宅の広い二階の十畳間で、社宅を出て以来久し振りに親子三人ゆくりと畳の上に休まさせてもらいました。

私共のお世話になりました高橋さんの御家族は、御主人御夫婦に祖母の方、大学在学中の息子の四人でした。

私共も家族の一員として食事など分けへだてなく接して頂きました。

ある朝、騒々しい物音に目をさまし、階下に降り玄関に出ますと、御主人の高橋さん以下全員真っ青な顔をして手を挙げていました。

満人の若い警官が当家の二男にピストルをつきつけて何やら大声でまくし立てていましたが、そのピストルを今度は私に向けて「手を挙げよ」といいました。

なんのことやら分からない私は、ポカンとしていますと工場長の高橋さんが「渡辺さん、手を上げて下さい」と必死な声、そんな折、私共を取り囲んでいた警官の一人が私の方へ近寄り、満語で

「ニデ・敦化電力の渡辺先生ではないか」といいました。私は「そうです、渡辺です」と答えますと、警官は「俺はお前を良く知っているがこんな所で前は何をしているのか」

「私は敦化の避難民でこのお宅にお世話になっているが。この状態は一体どうしたことか」と問いましたところ

「警官巡回のため、この家の門内に立ち入った際、飼犬の雄のシェパードが警察官に吠えついたのでこの若いのが態と俺達に犬をケシかけたので、この若いのを拘留するところだ。」との由、

「それは大変悪いことをした。今後そういうことは絶対させないし、犬は裏に鎖でつないでおくので今日のところは、私に免じて許してやって欲しい。」

と下手な満語で頼みました。信義を重んじ、その人の顔を立てる国民性のおかげで警官は私のいうことを諒としてそのまま立ち去ってくれました。

朝食前の小寒い朝の出来事でした。

敦化小学校で集団生活中に発生した「麻疹」の快復

しないまま移動しているうちに、幼い子供は痩せ細り泣く声も弱々しく唯母親の背におんぶされているのみでした。

葉一つなく弱いローソクの炎の消えるようにして次々と世を去り、吉林の定められた無名墓地に葬られました。

やせ細って骨と皮のようになって、私の横に休んでいた長男が真夜中に何か訴えているのに気付きました。

「マンマ」「マンマ」といって食事を要求している様子に目ざめました。

夕食の残りの冷たくなった重湯をスプーンで口で暖め、三杯くらい呑んだようでした。

四杯目は口を開きませんでした。そして眠ったようでしたが、朝氣付いた折は冷たくなっていました。

喉の付近が異状に太くなっていたように思いました。誕生祝いに作って持ち歩いていた子供の疳着につみみました。

当家の祖母の方がお経を上げて下さいました。走る

列車内から捨てることを思えば、長男は幸せだと思つてあきらめ、高橋家から提供を受けた道具箱におさめて、付近に分散している敦化組の四人と、私共の六人で定められた場所へ向い埋葬しました。

物珍らし気集つている原住民から、敦化以来男装の案内へ「他的主婦」というような声が聞え、なんとなく長居は出来ないように思い、立ち去り兼ねている家内を促して墓地を後にしましたが、可愛い盛りの子三歳児、再び訪れることの出来ない異郷の地に葬つて帰りました。

花一つ供えることも出来ず、誠に可哀そうでありませんでした。

撫順市へ移動

冬を迎えて準備も少なく、少しでも暖かい所へと、今一つは内地引揚げ時の母港となる「コロ島」の近くの満鉄機関での撫順炭鉱へ引揚げ前の最終の集団移動を計画、十月中旬、敦化以来の満鉄社員全員二百人ほどが、屋根のない貨車に二十五人ぐらい分乗して、冬の陽の弱い午後三時頃、吉林駅を離れることになりま

した。

満州の冬は寒い、まして夜の寒さは格別で、晴れた夜の霜はキラキラと衣類に光る、体を寄せ合つて、その寒さにじつと耐えました。

朝を迎えまして外を見ますと、汽車はまだ吉林駅の構内で昨日のまま動いていませんでした。

どうしたことかと思つているうちにようやく汽車は動きはじめました。

若いお母さんが背負っている幼児が、泣きもしないのを気にしてお隣りの奥さんが、

「貴方の子供さん泣きもしないでおとなしいネ」といいますと

若いお母さんは間をおいて「ええ夕べから息していません」……と。

哀れにもこの若いお母さん、死んだ我が子を背負つて、じつと耐えていました。

日本に帰れるだろうという淡い夢に託して、屋根のない貨車の中で不足もいわずじつと皆耐えました。

列車は、駅名は忘れましたが大きい駅に給炭と給水

のため、停車しました。

昼食との連絡がありましたので、水でもと思い水筒を持ってホームをウロウロしていますと、金筋入りの駅助役に呼びとめられました。

ウロウロするなどでも注意されるだろうと思つていきますと、私の顔をじっと見つめていた駅助役は

「ニデは敦化電力の渡辺先生ではないか。」

「ソーデス」と答えると彼は

「俺は明月溝駅（敦化より東の方にあつて京図線の主要駅）にいた折、お前を良く知つている。この汽車は俺が手を挙げない限り動かないから安心して俺について来い。食事を作ってやるから、主婦は、子供はどうしたか」と矢つぎ早に満語でたずねてきました。

駅舎の横の暗い狭い部屋で、たくさんの飯を炊いてくれました。思わぬことで貨車に持ち帰って皆んなで分けて頂きました。

食事の出来るまで彼は私に問いました。

「ニデは再度満州に来るか。」私は「必ず来る。」と答えました。

彼は「それはいけない、絶対来てはいけない」と強い口調で申しました。

私は思いました。再度来るということは、侵略に来るといふように思われたようだったので、「私の子供が吉林で死亡し、吉林に埋めてあるのでお参りに来てやりたい、子供のために。」といいますと、「それなら良い。」といいました。

この駅助役も、吉林での警官も私には全然顔見知りの人でもなく、又両者にどんな接し方をしたかは、勿論分かりませんが、敗戦により外地で困っている時に、僅かな恩義を忘れずに、大きく返してくれる現地の満州国の方々の厚い信義に感謝しました。又助役は発車少し前にホームから私に、

「この貨車から他の車へ移動するな、汽車が停車したら、ホームの方に注意しろ」というような満語を残して、右手を少し挙げ、別れの挨拶をして駅舎の方へ線路を横切つて小走りに去って行きました。

撫順駅の一つ手前の駅で停車した折り、国府軍の軍服を着た小児のような兵隊が貨車の連結器に足をか

け、渡辺、渡辺と呼んでいるのに気付いて近寄りますと、渡辺か、と確認してポケットから青天白日旗のバッヂを出して、私にくれ、「困った事があつたらこれを出せ」というようなことをいって、辺りをはばかりようにして立ち去りました。

このバッヂを使うようなことは一度もありませんでした。

まして蒋介石軍は中央軍に追われる状態にありましたので、持っていない方が良くと考えているうちに紛失したように思っています。そして私共は撫順市の緑ヶ丘小学校に収容され赤軍の使役をして、撫順炭鉱の石炭を掘ることになりました。

軍票でしたが、給料も貰えるようになりました。市内は平穏でした。

緑ヶ丘小学校の真向いに永安台小学校があつて避難者で一杯でした。

毎朝決つたように担架で何か分かりませんが運んでおられるのに気がつきました。

始めのうちは死者が出ると市営焼却場で焼却されて

いました。死亡者が多くて焼却場では間に合わず、学校の近くで埋葬されていたようでしたが、それも又追いつかず、近くにある防空壕に投げ捨てるより他に方法がなかったようです。

永安台小学校では集団生活中に発疹チフスが発生したようでした。

弱り切っている体では防ぎようもありません。まして薬ひとつない避難生活中にこの病気に罹つたら、運を天にまかせて、じいっと寝ているより他に方法がありません。

この病気の特徴として全身に悪寒が走り寒気と共に段階的に体温が上昇し、三十九度近くから又階段を一段ずつ下りるようにして、体温が平熱になるような状態であれば、生存の可能性を有していますが、三十九度近い体温が一気に平熱になるような場合は、生存の可能性は殆どない。

同じことを何回となく繰り返し、喋りながら大きく目を見開いたまま死に至ります。

この病気を媒介するシラミは住みついている人の体

温が下がり始めると、遠慮なく隣の人に移動します。

こうして永安台小学校に避難されていた方の多くは不幸の目に会われたようでした。

私共は、緑ヶ丘小学校の教室の板の間にアンペラー一枚敷いただけで寒い冬を越しました。

食事も不規則で米の飯も食せず、常に下痢になやまされていきました。

ある日一日の仕事の帰り、便意を催し、とてもこらえ切れず電車を降りて適当な場所を見つけて飛び込みました。その付近は雪が積もっていましたが、何か軟らかいものの上に降りたようでした。ズボンを下げてなんとなく下を見ますと、そこは防空壕の入り口で、累々たる死体の山でした。

ある死体は下の死者の上に自然な姿でうつぶせになり、ある死体は何か考えているような形、又目をカッと見開いている人、その殆どが裸体でした。

黒ずんだ皮膚の色に妙に口元が紅く見えました。

下痢どころか、寿命のちぢむ思いで飛び出しました。

この付近を通る通勤電車内で、あの防空壕から〇〇

国人が笑いながら、出たり、入ったりして何かを持ち

出しているというようなことを耳にしたことがありましたが、防空壕内の裸体の意味が良く入点出来ました。

撫順市内には同炭鉱を中心にして電車が走っていました。無料でしたが、客車でなく殆ど貨車で終戦後も殆ど日本人の手で運営されていたように思います。

車内に達筆で

「蔣統師万歳、打倒共産党」と書かれていたことを思い出します。

撫順市内は平穏でした。雪は降ってもすぐ溶けて暖かく非常によい町でした。

撫順炭鉱を初めて見ました。大きな山をすり鉢状に掘り下げ、その中腹に電車が走り、山全体が石炭で、石炭は掘るのではなく、危険を知らせるサイレンにより、付近の人達を待避させ、山肌を発破で崩し、ここに待機していたのか大きなシヨベルカーが出て来て今崩した石炭を炭車（撫順の貨車）に積み込む。十両ぐらいの炭車が石炭で一杯になると移動し、特殊の橋の上に乗ると連結機が外れ、一両が百八十度回転して石

炭はその橋の下で待っている大きな炭車に移される。

石炭を移し終ると四十五度ぐらいの傾斜を早い速度で上に引き上げられる。

撫順炭鉱の石炭はこの作業の繰り返しで外へ搬出される。

私の仕事は小さい炭車が一日(午前八時～午後五時)に何台石炭を運んだかを記録する役目でした。

石炭は無煙炭で掘りつくせない無尽蔵といわれていました。

諸設備は素晴らしく、山の中腹には所々に自然発火の火が燃え、夜は美しい眺めでした。

地肌(石炭層の表面)は地熱があつて暖かく、寒い冬でも背中を地肌につけて寝ころんでも寒さは感じませんでした。

撫順市内には至る所に無料のお風呂があつて、蒸気を送る配管がダクト内を縦横に走り、寒い日には、パイプの接続部分からもれる蒸気が白く見られました。

昭和二十一年の正月は、この緑ヶ丘小学校で迎えました。

内地からの情報で強い爆弾が日本に落ち、日本の都市は殆ど壊滅的な打撃を受け再起不能であるとか、又街で会う満人は「ミカド」といって、腹に手を当て切腹の真似をして見せました。

そして引揚げも始まっているとの嬉しいニュースも流れました。

正月も終った昭和二十一年二月頃、緑ヶ丘小学校から撫順炭鉱の社員住宅に移りました。

通勤途中に大きな市場に、恐ろしいような肉、人間の太股当りに良く似た肉塊が二つ、気持ちの悪いような黒ずんだ色をして他の肉と共に並べられています。

三月半ば頃、中央軍(共産軍)が北の方から撫順に侵入、これを阻止せんとして、進入路に架かる鉄橋を爆破せんとする蔣介石軍との間に戦争が始まったようでした。

次の日、撫順市内の要所には、共産軍の姿が見られましたが、日本人に対して危害を加えるようなことはありませんでした。

同じ社宅に避難している満鉄社員が引揚げのため、「コロ島」に向かって出発して行き、引揚げも夢でないよい現実なものとなって来ました。

引揚げ

六月末、遂に敦化組にも引揚げの連絡がありました。天にも昇るような気持ちで支度にかかりました。持って帰るものは着替えとアルミの鍋、買い求めた食糧品でした。

「コロ島集結」ということでしたが、どこをどう通つて来たかはどうしても思い出せませんが、多くの日本人の集結しているコロ島乗船場に集団で到着しました。

そのお隣りに敦化電気区の通信工区の手長であった高橋さんが奥さんを抱くような格好で立って見えませんでした。

生色の全くない顔、絶えずブルブルと痙攣し、今にも倒れそうな体を御主人の高橋さんに支えられて、苦しそうに立っておられました。

「苦しそうですが大丈夫ですか」と声をかけますと、

高橋さんは、ヒゲもじゃの顔で、

「こんな体で、引揚げに参加するのはとても無理だし、皆さんにめいわくかけることになるので引揚げを一回遅らせたかったが、少しでも日本に近いところに帰りたい、そこで死んだら捨てておいてお父さん達だけ帰れば良い……、とこれがいいので、参加して出て来ました」……と。

引揚げの列は二歩ぐらい進んで又止まる、の繰り返しでしたが、一步又一步確実に、あの夢に見たあこがれの日本へ近づいていました。

でも高橋さんの奥さんの一步でも日本へ帰りたいという夢もつきました。

御主人の体にすがりついたまま崩れるようにして倒れ、付近の人の列が驚いて、奥さんの体をゆすつたり大きい声で名を呼びましたが、奥さんの目は再び閉くことはありませんでした。

現地日本人居留民団の方々の担架で日本とは逆の方向へ運び去られる、長年つき添って苦勞を共にしてきた奥さんに深々と頭を垂れて、身動きせず見送られて

いる御主人の胸中を思うに誠に切ないものがありました。引揚げの列は高橋さんに別れの時間を長く与えてはくれませんでした。

名簿の訂正、人員の点呼と、二歩進んで三歩止まりしながら、私共はようやく黒い船体の見えるところまで進んで来ました。

先発の方はもう既に船腹のタラップを登って乗船していました。つづいて私共も乗船しました。

昭和二十一年七月八日、アメリカ籍の輸送船リバテイー十八号はコロ島を離れました。

この船の船脚は早いので、先発の船は途中追越しすとの船員の話でした。

そして行き先は舞鶴とのことでした。

ああ、もうこれで夢にも見た日本に間違いなく帰ることが出来るんだという嬉しさが、船内のどの人の顔にも満ちあふれていました。

昨夜、玄海灘を越しましたが、波は静かでしたとの船員の話に、デッキに出て見ますと赤茶けた朝鮮半島の岸辺に青い波が白く砕けて日本海の近いことを思わ

せました。

船尾に水を切る巨大なスクリューを見て、力強さを感じました。

そして七月九日頃でした、遂に故国日本の舞鶴港沖に到着しました。

デッキにむらがり喰い入るようにして緑の山々を見守る引揚げ者の胸中は、感無量、じっと見つめている双の目には熱い涙が光っていました。

海外引揚げ者の皆さん御苦勞様でした、と大きな看板文字

「お父さん、ここはどこ」という子供の声にふり向きますと、六、七歳ぐらいの男の子が横に立ちつくしている父親にたずねていました。しばらくして

「ここは、お前が背負っているお前の母ちゃんや、お父さんの生まれた日本の国だよ……」

という父親の声に良く見ると、その子の背なかに白とも黒とも見分けのつかないような布におそらく引揚げ前に、死亡されたと思われる奥さんの遺品らしいものがくくりつけてありました。

その父親もきつと心の中で亡くなられた奥さんに、そつとつぶやいておられたことと思う、今、日本に帰ったよ……お前と一緒に帰りたいかったナ……と、

舞鶴沖は波静かでした。

終戦以来約一年、苦勞しながら、ようやく故国日本に帰って来ました。

引揚援護局で手続き後、長く満鉄社員としての一団体行動を解き、各府県単位ごとに舞鶴駅を出発、私は米原、岐阜駅へと出て高山線への乗り換え時間待ちを利用して、岐阜市内へ出ましたが一面の焼野原でした。

七月十三日夕刻五時少し前、故郷の玄関、高山線の白川口駅に降りました。

此の付近は昔のままの姿でした。

駅前の指定旅館で一泊し、翌十四日なつかしい我が生家に帰りました。

田植えの真最中でした。

引揚げ後

昭和二十一年十月、知人の世話で名古屋市南区のブラザー工業K・Kに就職が決まり、住宅も港区で借り

ることが出来、四・五畳の間ながら生れたばかりの子供と三人、引越して親子水入らずの生活が出来ました。

主食の配給は満足ではありませんでしたが、引揚げ時の苦勞を思えばどんなことでもしのぐことが出来ました。

当時私は三十歳で健康でしたので働き、生活の安定を計りました。

昭和二十三年十月市営住宅に引揚げ家族として入居が出来、六畳二間ながら、独立家屋でしかも南区の就職先の近くで大変好都合でした。

就職した当時は、広い工場敷地は戦災による瓦礫の山でしたが、またたく間に整地され、増産に対応して工場が増築、入社時、九十番目のタイムレコーダ番号がいつの間にか四百番を越していました。

そして戦後の経済的に好況時代を迎えて、引揚げの苦勞は年と共に過去のものとなりつつあるようです。

しかし、家族のことを思っつて身を犠牲にされた老人、夢にまで見た日本への乗船寸前で、帰らぬ人となった

方、止むなく走る列車から投げ捨てざるを得なかった幼い子のなきがら。今なお、訪れることの出来ない異郷の地に眠る多くの幸うすい霊に心から冥福を祈りたい。

執筆者の横顔

渡辺氏は、岐阜県加茂郡西白川町出身で、大正六年生れの七十五歳であるが、未だ心身とも頗る健康に恵まれている。

学校を終えると、技術を身につけなければ人生の行路はないと自らに訴えて努力し遂に国家試験の甲種電気工事士に合格した、中々先見の明と努力の士である。この国家試験で電気技士となったお陰で、彼の人生は大きく拓けていけたのである。人生計画満点である。

昭和十一年、徴兵検査で甲種合格の命下るや、早速、在外部隊に希望した、検査官から「ヨシ！ワカッタ」と言われた通り、満州部隊に入営し、軍隊では特技を重宝されて優秀な成績で除隊、故郷に華を咲かせた。

昭和十五年、南満州鉄道株に採用され、吉林鉄路局敦化電気区勤務となり、きれいな社宅に入った。

同十八年に妙齡の夫人を迎えて、順風満帆と邁進してゆく

同二十年、何ぞ凶らん、ソ連軍の日ソ不可侵を打破つて不法侵攻にあい、空爆と地上戦車の襲撃で暴行、掠奪、殺戮にあい、娑婆から一転して地獄にたたきのめされた悲劇をくぐり抜けるさ中一人息子は栄養失調で遂に亡くしてしまった。渡辺氏勿論のこと夫人のなげき悲しみは生涯つきまといつて淋しい限りと涙ながらの述懐である。

外地からの引揚者の体験労苦は大同小異こそあれ、渡辺氏は死線を越えられたのは、満鉄在勤中に満州現地人と親密に交際していた人々が多かったことである。彼は、人間の上に人間をつくらずの民族協和の精神で生き続けた体験から、混乱のさ中満系警察官から理解と協力を得られた、駅の満系助役から握りめしをたくさん差し入れを受け、収容所の仲間に分配している。戦争に負けた日本人、渡辺氏に満系職員から心と物を差し出して貰えたことは渡辺氏の力量だけでは無い、彼の人格品性に多くの満系中国人が尊敬していた

からであろう、日本人の鑑と言いたい。

引揚げれば、直ちに、ブラザー工業(株)に採用され、定年まで在職し家庭円満に恵まれている。現に引揚更生会の面倒な業務に精進して引揚者の方々から絶大な信頼をうけている。

今後、益々の健闘を祈る。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

戦後モンゴルに抑留されて

岩手県 阿部 有 藏

シベリア鉄道を走る

昭和二十年十一月二十六日、満州国黒河からソ連領に入り、ブラゴエ駅で貨車に乗せられ、行先はわからず列車は走り出した。駅員は男の駅員より女の駅員が多かった。男はたぶん戦争に出て、女がそうした職についたのであろう。

日本の場合もそうであつたらう。駅に停車するたびに、ロシア人の子供等が何か私達から所持品を取ろうとしてよって来ては、何かと言って雑のうなどに手を入れてゆく状態だった。

シベリアの寒さはきびしかった。列車は、水と石炭の補給以外には停車することなくどんどん走った。何日か走ったか、手帳に記入した日だと一週間は走った。もう日本に帰れるのぞみはない。それどころか、埋もれて人生の終止符になるような予感をいだいた。列車はどんどん走り続ける。駅と駅との距離は約二十キロもあるのだ。十二月九日午前四時ごろ列車は止った。

終着駅モンゴルへ第一歩

だれかがウラジオストクに行くなんて言っていたが、着いた所は、外蒙(モンゴル)国境ナウスキ駅であつた。仮の天幕小屋で雪も積もっており、また寒さも零下二十度はあつたらう。約三時間ぐらいのうちに飯盒一杯に食糧をもらう。ここまで持つて来た身のまわりのもので、自分で背負つて歩いて歩ける程度にして、あとのものはここにすてるとのこと。